

●モノグラフ小学生ナウ



コミュニケーション



vol.4-11

©1985(株)福武書店 教育研究所/加藤智博・和田京子・田中美幸
放送大学教授 深谷昌志・三井情報開発研究員 田中雅文

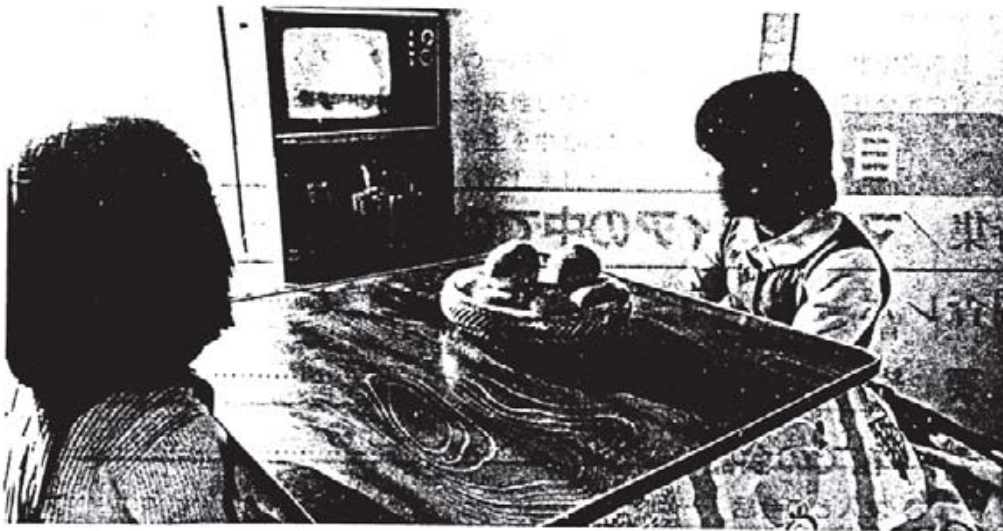
目次

特集／マスメディアの中での成長	2
調査レポート／コミュニケーション	5
要約	6
1. 学校での会話	8
● 友人との会話	8
● 教師との会話	11
2. 家庭でのコミュニケーション	12
● コミュニケーションの実態	12
● 父母に対する評価との関連で	16
3. 電話と子どもたち	19
● 電話使用の実態	19
● 電話使用の周辺	22
4. コミュニケーションをめぐる心理的問題	24
● 対人コミュニケーションの重要性	24
● ストレスの強い子どもたち	26
● コミュニケーションの自信	27
まとめに代えて	30
シリーズ／講座・子ども調査入門⑩	
予算のたて方	31
資料1 調査票見本	35
資料2 学年・性別集計表	42

特集

マスメディアの中での成長

放送大学教授 深谷昌志



テレビの功罪は測りにくい

小学高学年生は、毎日平均して2時間半をテレビ視聴に費やしていると言われる。もちろん、視聴の長さは、土曜は3時間、日曜は3時間半と伸びる。したがって、学校のある週の場合、視聴の長さは19時間となる。となると、たいした長さとも思えないが、睡眠時間を除く生活時間の中で、テレビのもつ比重は、2割にちかい。しかも、夏休みなどの間も、テレビとのつき合いはつづく。さらに言えば、現代の子どもたちは、もの心ついてから、ずっとテレビを友とした育ち方をしている。

したがって、テレビを友としたそうした育ち方は、子どもたちの成長に、功罪とりまぜた感じで、さまざまな影響を及ぼすと考えられる。かつて、テレビが普及していないとき

は、テレビのもつ影響力を調べるために、テレビを見て育っている子どもとそうでない子どもとを比較して調べる方法が重視された。もともと、その当時でも、テレビを見ているのは都会地、そして見られないのは過疎地だったために、そうした調査は地域性の比較となりがちで、テレビの功罪を浮きぼりにするには至らなかった。

しかし、現在では、独自の考え方からテレビをつけていないごく少数の家庭を除くと、どの家庭も、テレビのある生活を送っている。そのため、テレビの功罪を明らかにすることは、人間にとっての空気の意味をたずねるようなもので、おおよその推測はできても、厳密な意味での実証は行いがたい。

活字に接しはじめたのは大正

そうした状況の中では、テレビのある中で

育つのがあたりまえのように思いがちになる。しかし、子どもの歴史をひもとくと、長い間、子どもたちが、テレビはむろんのこと、いわゆるマスメディアとは無縁の育ち方をしてきたのがわかる。

子どものころ、となりの学校の門の前へ行き、「おんぼろ学校、ぼろぼろ学校。と言って逃げ帰ってくるのが、ちょっとした冒険だったことを思いおこす。当時、となりの校区は、子どもにとってまさに、見知らぬ人の住む異国、あるいは敵地であった。

そういえば、「人さらい。という言葉が、母親の口から、おどし文句として使われていた。知らない所へ行くと人さらいが出るから、家のまわりをいろうというしつけである。

そうした事例から察せられるように、子どもたちは、遊び仲間の住む家庭を中心とした地域を生活圏として成長していった。同じ校区の中は、一応の生活圏をつくっていたが、それでも、あそこにはいじめっ子が多い、あのあたりはお化けが出る、などと言って、通るのを避ける場所が少なくなかった。

子どもたちは、長い間、そうした友だち同士ふれ合い、つまりパーソナルな輪の中で育っていったのであって、マスメディアがパーソナルな面をこえたのは、この20年来の変化にすぎない。

具体例を活字メディアにとってみると、童話が、子どもの世界へ入り始めたのは、それほど昔の話ではない。日本ではじめて子ども向けの雑誌が刊行されたのは、明治11年に刊行された「穎才新誌」と言われるが、マスメディアという感じの子ども雑誌が登場したのは、創刊号から12,000部を印刷した「少年園」(明治21年)や「日本之少年」(明治22年、博文館)、「こども」(明治22年、東京教育社)以降となる。その後、明治24年には、大手出版社の博文館から「少年文学叢書」が出版されている。日本の児童文学史上の1ページをかざった巖谷小波の「こがね丸」は、

その中の1冊である。ちなみに、女の子の間に人気のある「小公女」が若松賤子の訳で「女学雑誌」に連載され始めたのは明治23年、「乞食王子」が文武堂から出版されたのは、明治30年であった。

そうした歩みは認められるものの、この時期に、子ども向けの雑誌や本に接した子どもは、富裕層の家庭に限られ、子ども雑誌が、子どもの世界に浸透していったのは、明治40年代へ入ってからであった。明治38年に実業之日本社から「幼年の友」や「日本少年」、翌39年に、博文館から「幼年画報」や「少女世界」が刊行されたのがその1例だが、明治44年には、「立川文庫」の出版も始まっている。周知のとおり、「立川文庫」は1冊3銭で新しい本を読める一種の貸本制をとり入れ、「岩見重太郎」や「水戸黄門」「宮本武蔵」などを、いわば、子ども向けの講談本の形で刊行していった。そして、それまでの雑誌が、どちらかというと都市を中心に流布していったのと比べ、農村の子どもたちにも親しまれたという意味で、「立川文庫」が子どもに影響を与えたものは大きい。

なお、芥川龍之介の「杜子春」や豊島与志雄の「天下一の馬」、宇野浩二の「落の下の神様」など、現在では名作とよばれる童話や北原白秋の「ベチカ」や「この道」などの詩を掲載した鈴木三重吉の「赤い鳥」が創刊されたのは、大正7年であった。そのほか、「子供之友」(婦人之友社、大正3年)、「コドモノクニ」(東京社、大正11年)、「幼年倶楽部」(講談社、大正15年)のように、大正時代へ入ると、それぞれのレベルで、子どもたちの人間形成に影響を与えたと思われる雑誌の刊行が続いている。

テレビとのつき合い

そうした子どもの世界に放送メディアが届き始めるのは、昭和7年6月(大阪のJOBK

では昭和3年5月)関屋五十二と村岡花子とが1週間交代で「コドモの新聞」を始めたころからで、これは大正14年にラジオの本放送が始まってから8年後のできごととなる。といっても「コドモの新聞」は、午後6時から20分までの「子供の時間」に続く5分番組であるから、全部の時間を合わせても30分にみえない。こうしたラジオ時代は昭和30年代まで続くが、この間昭和22年7月には「鐘の鳴る丘」が始まり、子どもたちの人気を集め、昭和25年末まで790回にわたって放送されたので「鐘が鳴りますキン・コン・カン」を聞いて育った方も多かろう。

なお、わが国でテレビ放送が始まったのは、昭和28年2月、そしてテレビの受信契約台数は、昭和33年の100万台から35年の500万台を経て、37年3月には1,000万台を超え、家庭当たりのテレビ普及率はほぼ5割に達する。

この間すでに、昭和31年にはアメリカのテレビ映画「スーパーマン」、人形を使った「チロリン村とくろみの木」の放送が始まり、さらに昭和33年2月に、国産テレビ映画の第1号として「月光仮面」が登場している。

その他、「名犬リンチンチン」、「名犬ラッシー」、「あんみつ姫」、「アーフウー」、「ザ・ヒットパレード」など、育った年代によって思い出に残るテレビ番組はことなるのであろう。

さらにまた昭和38年には国産初のアニメ映画として「鉄腕アトム」が作られ、以下「鉄人28号」、「おぼけのQ太郎」、「巨人の星」などと続いて現在にいたっている。

かけ足の形で、子どもとメディアとのふれ合いをたどってきた。このようにみえてみると、マスメディアのもとでの成長は、きわめて新しい体験で、そうした成長のスタイルを手放しで喜べない気持ちがある。

たしかに、テレビを通して、子どもたちの見聞は広がり、そして、知識の量は増加していく。しかし、考えてみると、そうした知識

量の増大が、子どもにしあわせを与えるかどうかは疑問であろう。子ども時代は校区の中で生活し、成長していくにつれて世界が広がっていくのが、やはり、子どもに合った成長のスタイルであろう。

しかし、そうした指摘は世の中の流れに逆った時代遅れの認識なのかもしれない。分析の角度を変えてみよう。テレビやラジオを通して、子どもの世界が、はるか遠い社会へ広がっているように思える。しかし、いくつかのデータを手がかりにすると、子どもたちは、手近にある気ばらしの対象としてしか、テレビをとらえていないのがわかってくる。テレビの草創期に、電気紙芝居という言葉がはやった。そうした言葉のとおり、子どもたちにとって、テレビは、家の中にあって、スイッチをひねれば、いつでも楽しませてくれる電気紙芝居としてしか機能していないのであろうか。

しかも、子どもたちは、放課後、遊び友だちをもつことなく、テレビやまんがを友とした生活を送っている。このようにみえてみると、情報化社会の到来などというものの、子どもたちが人間的に心を通わす対象が、狭く限られているのを感じざるをえない。

子どもたちのこうした姿に、アメリカの社会学者リースマンの「孤独なる群衆」を思い出さす。もちろんリースマンの指摘したのは、第二次大戦直後のラジオ時代のアメリカ社会のことだが、マスメディアに囲まれ、はなやかなようにみえて、その実際は、パーソナルな人間的な絆に乏しい。そうした大衆社会状況の中での孤独が、日本の子どもについても、より深刻な形で浸透しているのを感じる。マスコミの発達により、コミュニケーションの輪が拡大された。そうした形で、手放しで喜べないものが、マスコミと子どもとの間に存在することを指摘して、以下、コミュニケーションについての調査結果の紹介に入りたいと思う。

調査レポート



コミュニケーション

放送大学教授 深谷昌志
三井情報開発研究員 田中雅文

昭和57年は、世界コミュニケーション年であった。これは国際連合総会の決議により設定されたもので、「通信の設備や仕組みの発展」をテーマとして、世界各地で事業が推進された。わが国でも郵政省が中心となり、エレクトロニクスなどを用いた新しい通信メディアに関するさまざまなイベントが催された。

しかし、コミュニケーション年と銘打ちながら、通信メディアの発展ばかりを取り上げるのは問題と思える。われわれの社会が円滑で潤いのある状態を保つためには、人間同士の心のふれ合いが大切であり、その基本はFace to Face（顔をつき合わせた）のコミュニケーションである。子どもの心理的・社会的発達にとっても、家庭や教師、友人たちと面と向き合って感情のコミュニケーションを行うことが重要な意味をもつことは、言をまたない。

たしかに、通信メディアの発達と普及は

コミュニケーションの範囲と可能性を広げるし、そういったことを通して、子どもが自己の世界をより大きく育てることもできるだろう。とはいうものの、最近のエレクトロニクスやいわゆるニューメディアに向けての社会全体の突進ぶりは、人間同士のなまのふれ合いによるコミュニケーションの重要性を、置き去りにしているかのように見える。

この調査レポートは、通信メディアの発展のみをテーマとした世界コミュニケーション年に対して、Face to Faceのコミュニケーションがもつ重みを主張するための、ささやかな抵抗である。そして、明るくもてはやされる通信メディアの発展の裏で、子どもが自らの世界の中で対人コミュニケーションをどのように行っているか、その実態を少しでも明確にするとともに、そこにひそむ問題点をさぐりだすことをねらいとしているものである。

要約

① 同級生との会話

同じクラスの子のうち、1日に話をする相手は11~20人(35%)、そのうち、かならず毎日話をする相手は6~10人(34%)が、それぞれもとも多い(図1)。したがって、同じ教室の中においてもお互いに話をしない相手が、そうとういることになる。



② 夕食時のテレビと会話



夕食のとき一生懸命になることは、テレビを見ること(33%)、家の人とおしゃべりすること(32%)で、テレビ派とおしゃべり派が同程度いる(表1)。

③ 電話使用の実態

電話を自分からかけることが週3~4回以上の子は37%(図10)。会話時間は5分以内が8割以上(図11)、会話内容は、遊びの約束(「よく・わりと」話す=71%)がもっとも多く、連絡事項中心の電話使用である(図12)。



④ 友人の家までの距離と電話使用

連絡事項を電話で知らせる子の割合は、友人の家が「となりにあるとき」11%、「2～3分離れているとき」40%、「7～8分離れているとき」81%である。つまり、友人の家が歩いて7～8分くらいの距離になると、ほとんどの子が電話を利用する(図15)。



⑤ 対人コミュニケーションの重要性



もしも口をきいてくれなくなったらとてもつらいと思う割合は、友人62%、母親61%、父親58%で、親しい人との日常のコミュニケーションが、子どもの生活の支えとなっていると言える(図16)。

⑥ 攻撃的コミュニケーション

「気に入らない友だちをなくってやりたい」(「いつも・ときどき」思う=46%)、「思いきりどなってみたい」(「いつも・ときどき」思う=45%)といった攻撃的なコミュニケーションに対する欲求が強い(図17)。



サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	293	306	599
5年	329	302	631
6年	303	257	560
計	925	865	1,790

調査概要

対象●茨城、東京、神奈川、静岡の
小学校4、5、6年生
時期●昭和59年7月
方法●学校通しによる質問紙調査

1. 学校での会話



友人との会話

まずはじめに、子どもたちが日ごろ、同じクラスの子との程度話をしているかをみてみよう。図1によると、(1)1日に話をする相手の数は11~20人(35%)、そのうち(2)かならず毎日話をする相手は6~10人(34%)が、それぞれもっとも多い。

今回の調査の対象となった子どものうち、半分は41人以上、3分の1は36~40人の規模をもつ学級に属している。したがって、図1の結果からみると、朝から夕方ちかくまで同じ教室の中ですごしていても、お互いに話をするということもない相手が相当数いるということになる。ただし、学年別集計結果によれば、学年が進むにつれて、話をする相手の数は増加する。

それでは、同じクラス以外の子どもとは、

どの程度言葉を交わしているのだろうか。図2において、ほとんど毎日話をする子の割合を相手別にみると、「学年が同じで別のクラスの子」52%、「学年のちがう子」39%、「他の学校の子」8%となっている。塾などで、学校のちがう子どもと知り合うケースも多いのだろうが、週1~2回まで含めると、毎週他の学校の子とも話をする子どもが4割ちかくもいることは、注目に値しよう。

これらの結果を学年別にみると、「学年が同じで別のクラスの子」と毎日話をする子どもの割合は、学年の上昇とともに増加している。つまり、図1の結果と合わせると、話し相手の数でみる限り、他のクラスも含めた同じ学年の範囲内では、進級とともに、つき合いの範囲が広がっていくと言えよう。これに

図1・クラスの子との会話

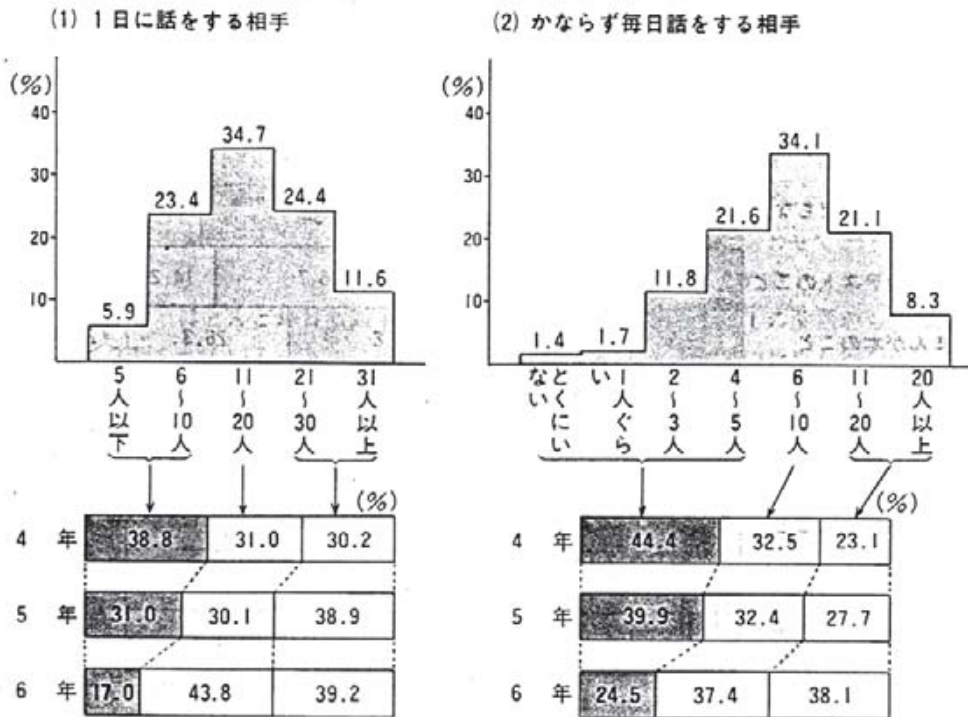


図2・クラス以外の子との会話



図3・仲のよい友人との会話の内容

	性別にみた「よく話す」割合 (%)				男子 (%)	女子 (%)
	よく話す	わりと話す	あまり話さない	ぜんぜん話さない		
1. 学校でのいろいろなできごと	23.9	39.1	27.7	9.3	20.4	27.7
2. クラスの友だちなどのうわさ話	20	33.4	34.7	11.8	15.3	25.1
3. 勉強やテストのこと	18.4	30.7	36.7	14.2	16.7	20.2
4. まんが本のこと	7.3	21.8	34.6	26.3	24.4	9.8
5. おたがいのなやみやひみつ	14.3	17.5	33.7	34.5	9.8	19.2
6. 人気があるテレビ番組のこと	7.3	29.2	40.5	16.2	17.9	10.0
7. 学校の先生のこと	7.3	22.2	44.7	21.8	10.1	12.5
8. 好きなタレントや歌手のこと	9.5	14.7	39.4	36.4	3.9	15.5
9. 親やきょうだいのこと	7.9	21.0	42.3	28.8	6.1	9.8

○印は有意差あり

対し、「学年のちがひ」というタテのつながり、「他の学校」といった自分の通う学校のわくをこえたヨコのつながりに関しては、高学年になることによって、かならずしもコミュニケーションの広がりが増すわけではないと考えられる。

つぎに、話題という、会話の質的な側面に移ることにしよう。図3によれば、全体では1.学校でのいろいろなできごと(「よく話す」24%)、2.クラスの友だちのうわさ話(「よく話す」20%)、3.勉強やテストのこと(「よく話す」18%)といった、学校に関連する内容がよく話題として出されている。子どもの生活の中で、学校の占めるウエイトが高いこと

を示す結果と見えよう。また、テレビやまんがについても回答率が高く、子ども社会へのマスメディアの浸透ぶりがよくあらわれている。

そして、これらのマスメディアに関する話題は男子に多く、女子では友だちのうわさ、お互いの悩み、好きなタレントなど、自分も含めた、「人間のからむ話題」が多くなっている。こうした性差については、このシリーズで以前東京、神奈川、茨城の小学生を対象として行った調査(モノグラフ小学生ナウvol.3-10「友だち」)でも同様にあらわれており、一般的な傾向とみなしてよいのかもしれない。

教師との会話

学校における子どもの人間関係の中で、教師との接触も、重要な位置を占める。そこで、担任教師との会話の実態をみたものが、図4である。

これによれば、「ほとんど毎日」話す子どもが27%と、3割ちかくいる一方で、週に1回も話さない（「月1～3回」「ほとんどない」）子どもも28%にのぼり、教師との個人的接触が少ない子もかなりいることがわかる。

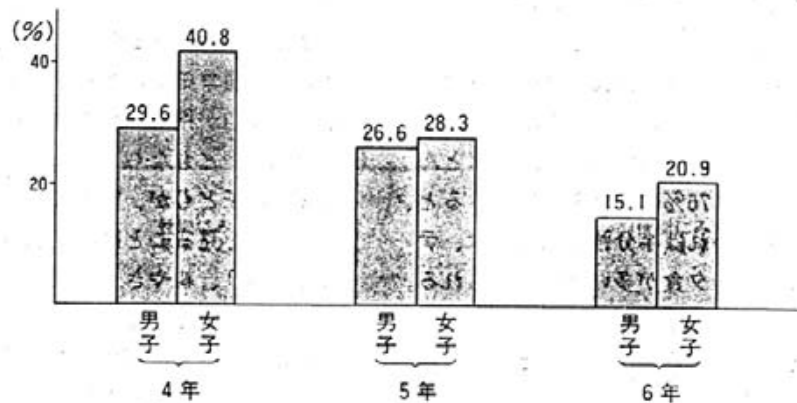
「ほとんど毎日」会話をする割合を、性・学年別でみると、男子よりは女子、高学年よ

りは低学年のほうが高く、担任教師と個人的に話をする機会が多くなっている。つまり、図1、図2の結果と合わせて、学年推移と人間関係の変化をまとめると、学年が進むにつれて、教師との1対1の関係から、しだいに友人同士のつき合いの比重が増していく、ということになる。これは、学年が上がるにつれて、学級中での子ども集団のもつ意味が大きくなり、教師も、そうした子ども集団に着目して学級を経営しているあらわれと言える。

図4・担任教師との会話——休み時間や放課後

ほとんど毎日	週3～4回	週1～2回	月1～3回	ほとんどない
27.0	25.2	19.7	12.5	15.6

(性・学年別にみた「ほとんど毎日」の割合)



2. 家庭でのコミュニケーション



コミュニケーションの実態

家庭におけるコミュニケーションの場として、もっとも一般的なものは、食卓を囲んでの一家団らんのひとときであろう。そこで、まず、家庭での夕食のようすをたずねた結果を表1に示したが、その中から目につく傾向を要約すると、以下のとおりとなる。

1. 家族が全員そろって夕食を食べる日数が週3～4日以上は7割にちかくなっており、2. ひとりで夕食を食べることが「ほとんどない」子どもは76%にのぼる。3. をみると、「わりと」を含めれば半分強の家庭では、テレビを見ながらの夕食が多いと見受けられる。また4. では、76%の子どもが、家族全員での夕食を「とても」あるいは「わりと」楽しいとこたえている。

これらの調査結果から、家族そろってテレビを見ながら食事を楽しんでいるようすが、目に浮かんでくる。ただし、家族全員での夕

食を「とても楽しい」としている子どもは、低学年、とくに女子に多く、男子や高学年になると、楽しさの度合いがやや低くなることが、表1、4.の性・学年別集計結果にあらわれている。

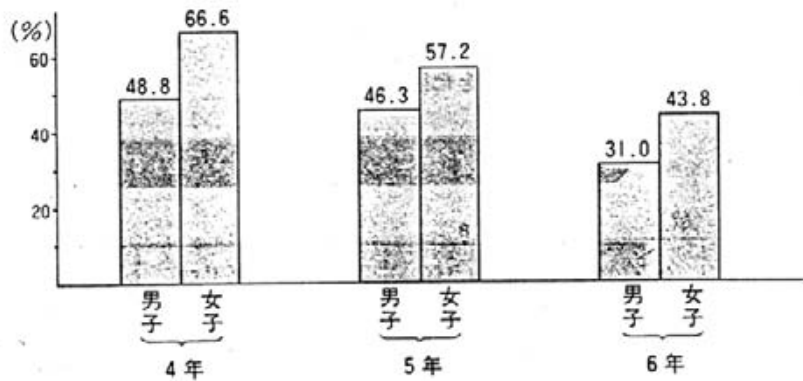
ところで、テレビが、家庭——とくに夕食時の家族間コミュニケーションを阻害する、という問題が指摘されて久しい。今回の対象となった子どもたちも、5.のグラフによれば、約3割の子どもが、家の人とおしゃべりよりテレビを見ることに一生懸命になる、とこたえており、親やきょうだいとの断絶がやや懸念される。しかし、家の人とおしゃべりをするこのほうに夢中になる子どもも3割おり、夕食時のすごし方については、テレビ派とおしゃべり派が同程度いることになる。そして、テレビ派は男子、おしゃべり派は女子に多く、4.の結果とも合わせて、やや図式化

表1・家での夕食のようす

	(%)				
1. 家族が全員そろって 食べる日数	ほとんど毎日 そろろう	週3~4日 そろろう	週1~2日 そろろう	月1~2日 そろろう	ほとんど そろわない
	43.7	22.9	19.0	4.2	10.2
2. ひとりで夕食を食べる 日数	ほとんど毎日 ひとり	週3~4日 ひとり	週1~2日 ひとり	月1~2日 ひとり	ほとんど ない
	1.8	4.5	7.2	10.2	76.3
3. 夕食のときにテレビ をつけている頻度	いつも つけている	わりと つけている	ときどき つけている	たまにつける こともある	ぜったい つけない
	30.2	21.8	15.5	16.8	15.7
4. 家族全員での夕食の 楽しさ	とても楽しい	わりと楽しい	まあ楽しい	あまり 楽しくない	ぜんぜん 楽しくない
	49.1	26.9	16.0	5.9	2.1

○印は最頻値

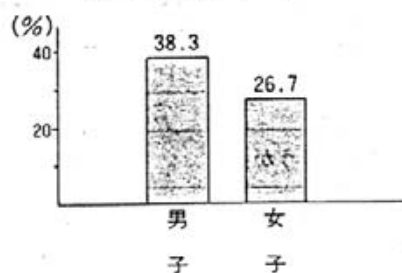
(性・学年別にみた「とても楽しい」の割合)



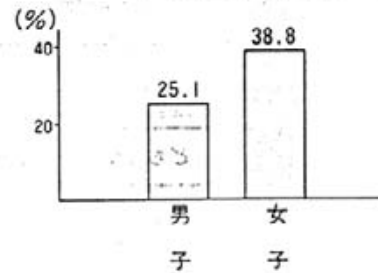
5. テレビと家の人との
おしゃべりのうち、
どちらに一生懸命に
なるか

テレビを見ること	どちらともいえない	家の人とおしゃべり をすること
32.7	35.6	31.7

(性別にみた「テレビを
見ること」の割合)



(性別にみた「家の人とおしゃ
べりをする」の割合)



したまとめ方を試みると、「家族とおしゃべりしながら夕食のひとときを楽しむ女の子」、「黙々とテレビを見ながら食事をすすめる男の子」という対比が浮かび上がる。

つぎに、夕食後から就寝までの過ごし方(図5)をみると、7割ちかくの子どもが、父母などのおとなと「一緒にいる」(CとDの合計)とこたえており、しかも47%の子どもは、ただ一緒にいるだけではなく、よく話をしている(D)。テレビ視聴に限ってみると、父母の同席なしに見ることの多い子どもが41%いるとはいえ(表2)、同席時に会話のない場合は21%にすぎず、番組の内容に関係のある話をするケースは5割を超えている(図6)。このように、気持ちが通じ合っているか否かは別として、夕食後もひとりで子ども部屋に閉じ込めるといったよりは、父母などの家族とともに過ごす子どもの多いようすがうかがわれる。そして、こうした傾向は、とくに女子で強くなっている。

最後に、子どもの家庭外での生活のようすがどの程度母親に伝わっているかを把握する

ため、表3、表4をみてみよう。これによると、母親が自分の友人を「全員」あるいは「だいたい」知っていることえた子どもは55%、母親に学校や友人のことを「よく」あるいは「わりと」話す子どもは66%にのぼる。ただし、後者については、「よく話す」の回答率が男子では低く、女子でも学年を追って低下する傾向がみられる。

以上にのべた家庭でのコミュニケーションの実態をまとめると、つぎのように言えよう。

全体の傾向としては、夕食を家族で楽しく食べ、食事のあとも親子の接触は比較的強い。そして、家庭外での子どもの生活について、母親は案外よく知っている。なお、属性別にみると、これらの傾向は、女子と低学年でより強い。また、前章の結果を受けて付言するならば、学年が進むにつれて子どもの世界は、父母や教師とのつながりから仲間集団でのつき合いに移行していく、という子どもの発達過程の特徴が、今回の調査にもあらわれている。

図5・夕食後寝るまでのあいの過ごし方

	A	B	C	D	(%)
全 体	12.9	21.1	19.3	46.7	
男 子	13.8	22.6	23.0	40.6	
女 子	12.0	19.4	15.4	53.2	

- A. 他の家族とは別の部屋で、ひとりだけであることが多い
 B. 他の家族とは別の部屋で、きょうだいでいることが多い
 C. おとなと一緒にいることが多いが、お互いあまり話をしない
 D. おとなと一緒にいることが多く、よく話をする

表2・夕食後のテレビ視聴における父母の同席の有無

項 目	%
どちらかというと一緒に見るほうが多い	58.9
どちらかというと一緒に見ないほうが多い	41.1

図6・父母同席時のテレビ視聴のようす(食事中以外)

	A	B	C	(%)
全体	21.2	28.1	50.7	
男子	24.1	29.4	46.5	
女子	18.1	26.7	55.2	

- A. お互いあまり話をせずに見ていることが多い
 B. 話をするが、番組の内容には関係のない話が多い
 C. 番組の内容に関係のある話をする人が多い

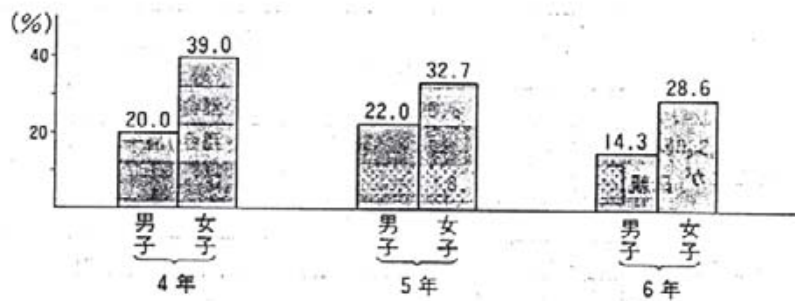
表3・母親が知っている友人の数

	(%)				
全員知っている	だいたい知っている	半分ぐらい知っている	あまり知らない	ほとんど知らない	
12.5	42.7	27.0	15.1	2.7	

表4・母親に学校や友人のことを話す頻度

	(%)			
よく話す	わりと話す	あまり話さない	ほとんど話さない	
26.0	40.4	26.7	6.9	

(性・学年別にみた「よく話す」の割合)



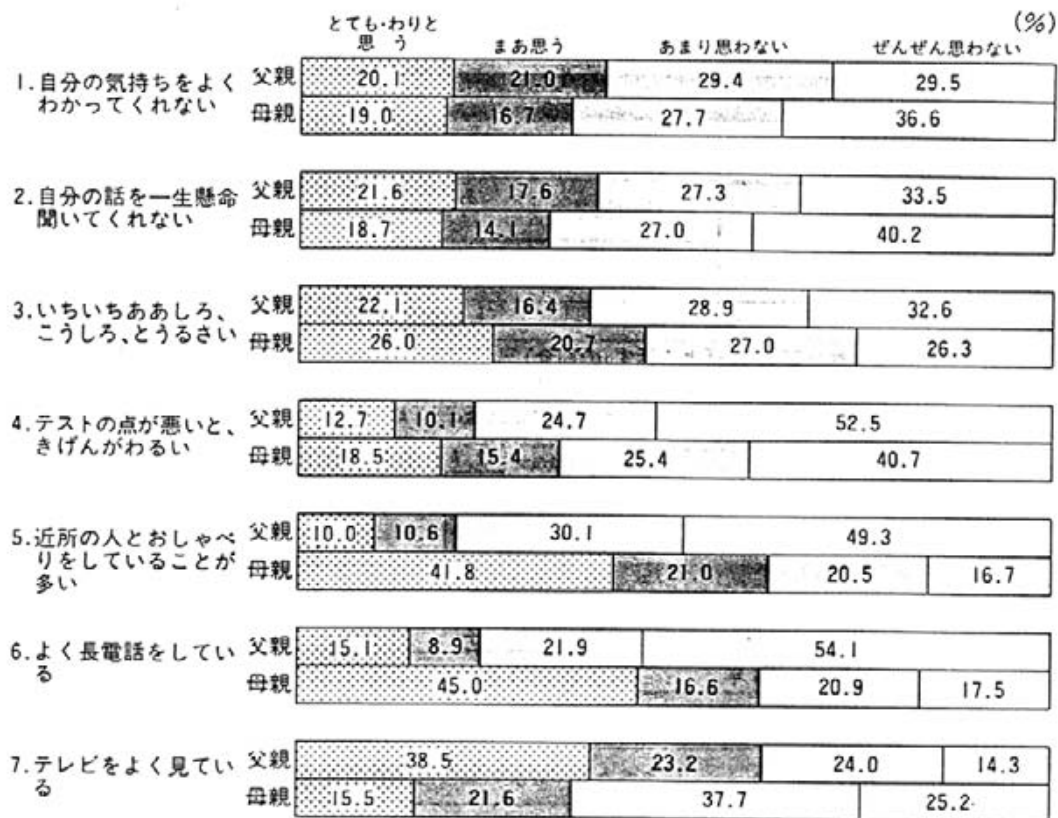
父母に対する評価との関連で

前節では、父母を中心として、子どもと家族との接触が比較的強いことを示した。それでは、そのように強い接触を保っている父親や母親のことを、子どもはどのようにみているのであろうか。

図7は、自分の父母に対する子どもの評価を示したものである。下位3項目において、近所の人とおしゃべりや長電話は母親、テレビをよく見ているのは父親、という評価のちがいが顕著になっているのは、さもありなんという感がある。また、日ごろ学校関係や子どもとの接触が多くなりがちな母親が、父親に比べて「テストの点が悪いと、きげんがわるい」というのも、当然の傾向と言えよう。

ところで、これらの項目以外、つまり1～3の項目は、子どもと両親の心のつながりを考えるうえで、とりわけ重要である。グラフによれば、第一に、これら3項目に関する父親への評価と母親への評価の間には、あまり差がみられない。コミュニケーションの対象としての父親と母親は、子どもからみて、同質の存在となっているのであろうか。第二に指摘される点は、「とても」あるいは「わりと」思う、という強い不満派も2割程度いるとはいえ、5～7割の子どもは、「あまり思わない」とこたえていることであろう。小学生の場合、当然のこととはいえ、日常生活の中で、あつれきや波風の立たない、平和な

図7・父母に対する評価



親子関係が続いている。

しかも、以上指摘した2点は、性別・学年別にほとんど差がなく、男女、4～6年生に共通の傾向とみることができる。むしろこうした属性よりは、図8、図9に示すように、コミュニケーションの度合いがもたらす影響のほうが強くなっている。たとえば図8の左上のグラフでは、父親が自分の気持ちをわかってくれないと「ほとんど思わない」子どもの割合は、ひとりぼっちの夕食が「ほとんどない」子どもにおいてもっとも高い(31%)。他のグラフについても同様で、いずれもコミュニケーションや、そのための条件が良い家庭

ほど、父母に対する子どもの評価が高くなっている。

なお、本モノグラフシリーズの、中、高校生を対象とした「中学生の世界」「高校生'84」などによると、こうした親子の仲むつまじさは、子どもが小学生段階にとどまらず、中学生、そして高校生になっても持続していくという。親に心理的に依存しきっている子どもたちで、ここから自立の遅れが問題となってくるが、それは、あくまで子どもたちの数年後の姿で、本稿でとりあげる小学生の場合は、親子の仲むつまじさはむしろ望ましいし、ほほえましい傾向であろう。

図8・父親に対する評価とコミュニケーション

(%)

父親に対する評価		1. 自分の気持ちをよくわかってくれない	2. 自分の話を一生懸命聞いてくれない	3. いちいち、ああしろ、こうしろとうるさい
父親とのコミュニケーション				
ひとりぼっちの夕食	週3～4日以上	16.0	19.0	25.0
	週1～2日	24.0	25.4	29.8
	月1～2日	27.6	33.5	28.1
	ほとんどない	31.3	35.6	34.1
夕食時に熱心になること	テレビを見ること	26.0	28.3	28.5
	どちらともいえない	24.8	30.5	29.4
	家の人とおしゃべりをする	38.3	42.2	40.0
家族全員での夕食の楽しさ	とてもたのしい	42.9	45.4	43.0
	わりとたのしい	17.1	23.3	24.4
	まあたのしい	14.7	21.3	19.6
	あまり(ぜんぜん)たのしくない	16.3	20.6	20.8
夕食後の過ごし方	別室でひとりだけ	21.9	27.3	27.1
	別室で兄弟と一緒に	25.1	29.2	26.6
	おとなと一緒に(会話少ない)	23.6	26.5	28.4
	おとなと一緒に(会話多い)	35.9	40.2	38.4
夕食後のテレビ視聴	父母と一緒に見る	32.5	37.0	32.9
	父母とは一緒に見ない	25.3	28.3	31.6
父母と一緒にのテレビ視聴(食事中以外)	お互いにあまり話をしない	23.2	28.4	28.9
	話をする(番組と無関係の話題)	26.5	28.3	31.0
	話をする(番組と関係ある話題)	33.8	38.6	34.8

グラフは「ぜんぜん思わない」の割合

図9・母親に対する評価とコミュニケーション

(%)

母親に対する評価		母親とのコミュニケーション		
		1. 自分の気持ちをよくわかってくれない	2. 自分の話を一生懸命聞いてくれない	3. いちいち、ああしろ、こうしろとうるさい
ひとりぼっこの夕食	週3～4日以上	22.9	30.3	20.6
	週1～2日	29.1	29.1	19.0
	月1～2日	30.1	38.1	26.0
	ほとんどない	39.3	42.3	27.6
夕食時に熱心になること	テレビを見ること	31.7	34.4	24.7
	どちらともいえない	29.6	35.2	20.1
	家の人とおしゃべりをする	49.5	51.4	34.4
家族全員での夕食の楽しさ	とても楽しい	50.6	52.7	35.6
	わりと楽しい	24.6	29.2	17.3
	まあ楽しい	20.0	23.7	14.6
	あまり(ぜんぜん)楽しくない	24.8	33.6	22.4
夕食後の過ごし方	別室でひとりだけ	26.8	28.8	21.5
	別室で兄弟と一緒に	31.5	37.4	22.3
	おとなと一緒に(会話少ない)	29.0	31.1	21.0
	おとなと一緒に(会話多い)	44.6	47.9	31.2
夕食後のテレビ視聴	父母と一緒に見る	40.2	43.6	28.6
	父母とは一緒に見ない	31.5	34.9	22.6
父母と一緒にのテレビ視聴(食事中以外)	お互いあまり話をしない	30.6	33.0	22.7
	話をする(番組と無関係の話題)	31.7	37.0	25.2
	話をする(番組と関係ある話題)	41.8	44.6	28.1
母親は子どもの友人の名前を	全員(だいたい)知っている	41.8	45.2	29.1
	半分ぐらい知っている	31.8	34.8	21.8
	あまり(ほとんど)知らない	27.2	32.0	24.1
学校のできごとや友人のことを母親に	よく話す	55.5	57.1	38.6
	わりと話す	32.2	35.0	22.1
	あまり(ほとんど)話さない	24.6	30.4	20.9

グラフは「ぜんぜん思わない」の割合

3. 電話と子どもたち



電話使用の実態

子どもにとってもっとも身近な情報のメディアは、テレビと電話であろう。特に電話は、子どもたちも自分から利用できるだけに、子どもの日常生活にとってなくてはならないものとなっている。この必需品ともいべき電話は、子どもたちの生活にはどの程度まで深く入り込んでいるのだろうか。

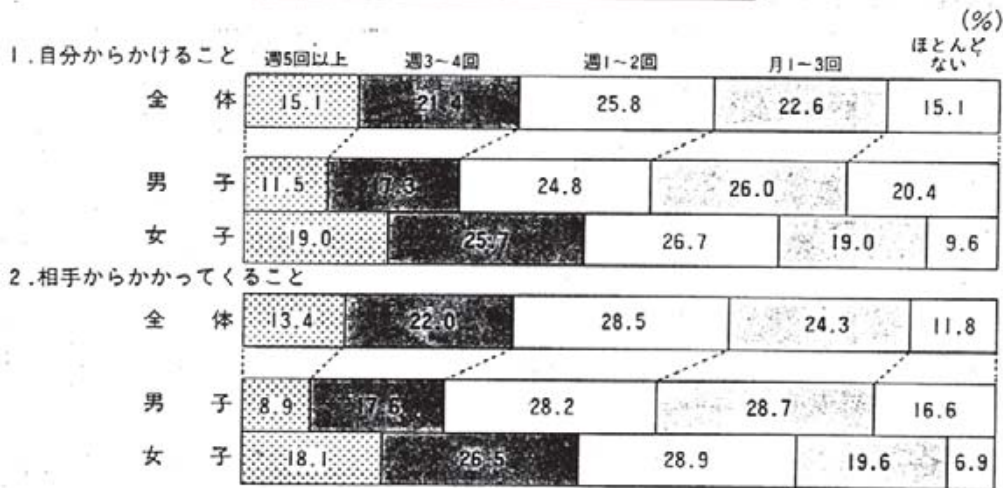
図10によれば、電話で友人と会話することが「ほとんどない」子どもは1割程度。逆に週3～4回以上使用する子どもは、1.「自分から」37%、2.「相手から」35%と、3分の1以上を占める。つぎに会話時間(図11)をみると、5分以内が全体の8割以上を占めており、いわゆる長電話の現象は、それほど多くの子どもにはあらわれていない。このことは、表5において、電話の過剰使用を自認する子どもの割合が低いことにも裏づけられている。

このように、小学生たちに電話使用がかなり一般化しているのはたしかだが、その使い

方は、比較的短時間で切り上げている、と言えそうである。もっとも、これらの傾向は属性によってことなり、頻度、時間とも女子と高学年において高く(長く)なっている。

つづいて、会話の内容を調べてみると、図12に示すとおりである。1.の遊びの約束以外は、図3に示した会話内容と同様の項目を用いて質問している。これによると、項目間における頻度の相対的關係は、若干の変動があるとはいえ、図3の場合とほとんど変化を示していない。しかし、遊びの約束だけが非常によく話されている以外は、各項目とも頻度が低い。つまり、電話による会話は、Face to Faceの会話とことなり、いろいろな話題について話し合うというよりは、連絡的手段としてなされることが多くなっている。図11において会話時間が短いことも、こうした連絡のために電話を使用することが多いとすれば、十分納得できよう。

図10・電話による友人との会話頻度

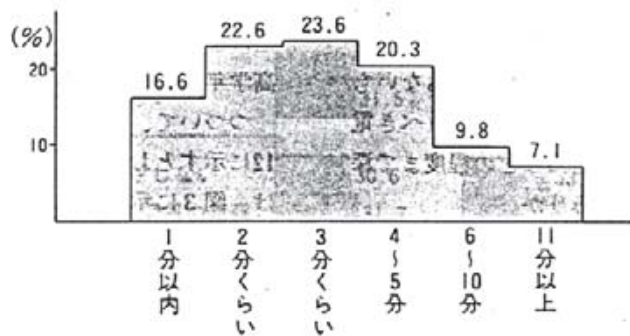


(性・学年別にみた「ほとんどない」の割合)

(%)

項目	4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1. 自分からかけること	26.9	11.7	17.7	11.0	17.1	5.5
2. 相手からかかってくること	22.2	8.2	15.0	7.4	12.9	4.8

図11・電話による友人との会話時間



(性・学年別)

(%)

学年	性別	1分以内	2分くらい	3分くらい	4~5分	6~10分	11分以上
		4年	男子	33.0	27.0	18.2	14.7
4年	女子	22.1	25.2	26.2	9.1	6.3	
5年	男子	26.1	26.4	24.8	12.7	6.2	3.7
5年	女子	18.9	23.0	27.7	15.9	10.5	
6年	男子	18.6	28.4	25.7	18.6	6.4	2.4
6年	女子	10.7	24.5	22.9	19.0	18.2	

表5・電話の過剰使用

(%)

項目	尺度				
	ほとんど毎日	週3~4回	週1~2回	月2~3回	ほとんどない
1. とくに用事がなくても、なんとなく友だちと話したくなって電話をかける	1.3	3.5	10.9	9.8	74.5
2. 今見おわたテレビ番組のことに、友だちと話したくなって電話をかける	0.9	2.2	3.6	5.1	88.2
3. 友だちと電話で話をしていると、時間をわすれてつい長電話になる	2.1	4.7	7.6	9.4	76.2
4. 顔をあわせたら話しにくいことを、電話を使ってしゃべってしまう	0.9	3.5	7.2	9.7	78.7

(性別にみた「ほとんどない」の割合)

○印は最頻値

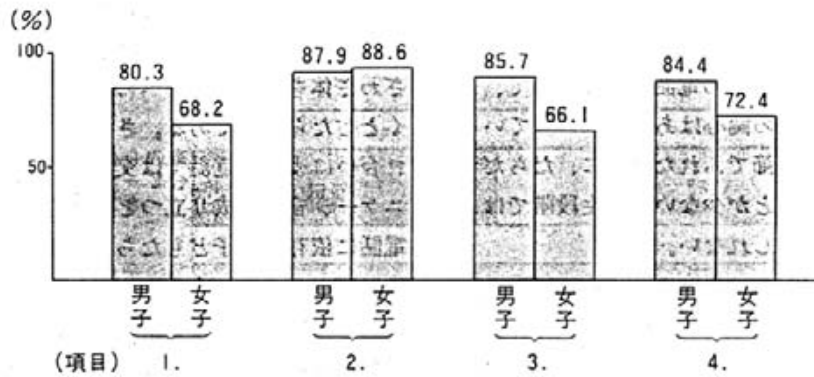


図12・電話による仲のよい友人との会話の内容

(%)

項目	よく話す		わりと話す		あまり話さない	ぜんぜん話さない
	よく話す	わりと話す	よく話す	わりと話す	あまり話さない	ぜんぜん話さない
1. 遊びの約束	39.8	31.3	19.1	9.8		
2. 学校でのいろいろなできごと	11.8	21.0	28.4	38.8		
3. 勉強やテストのこと	12.0	16.3	27.8	43.9		
4. クラスの友だちなどのうわさ話	9.0	15.8	27.6	47.6		
5. お互いのなやみやひみつ	9.0	11.4	22.4	57.2		
6. まんが本のこと	7.5	11.0	24.6	56.9		
7. 学校の先生のこと	4.8	7.5	27.3	60.4		
8. 人気があるテレビ番組のこと	3.7	7.4	29.1	59.8		
9. 親やきょうだいのこと	3.2	7.9	26.1	62.8		
10. 好きなタレントや歌手のこと	2.9	4.8	21.7	70.6		

電話使用の周辺

ここで電話使用に関する別の角度からの調査結果を紹介しておこう。

まず図13、図14に、子ども電話使用と家族の関心との関係を示した。図13によれば、子どもが電話を使用するとき、家族が「たいていそばにいる」18%、「たいていいない」34%となっており、ひとりでのときの使用のほうが多い。図14では、64%の子どもが、長電話に対して母親は注意しない、とこたえている。

このように、子どもの電話使用に対して、母親はじめ、家族の関心はあまり払われていない。もっとも、前節でふれたように、だらだらと長電話することが少ない小学生段階では、これでよいのかもしれない。

つぎに、相手がどの程度離れていれば電話を使用するか、という子どもの意識をたずねた結果が図15である。「たぶん電話で知らせる」と回答した子どもの割合は、友人の家が「となりにあるとき」11%、「歩いて2～3

分」40%、「歩いて7～8分」81%となっている。つまり、徒歩で2～3分の距離では半数、7～8分になるとほとんどの子どもが連絡のために電話を使う。

電話などの情報メディアの発達は、子どもにとっても、コミュニケーションの範囲や可能性を拡大するという利点を、たしかに含んでいる。しかし一方で、従来なら、いろいろな用事をたすのに自然と体を動かしていたのに、それがなくなって、運動量の減少や、わざわざ体を動かすことへの抵抗感の増大を招くとしたら問題である。さらに、直接的なふれ合いにより、電話では交わしにくいコミュニケーションが成り立つと考えられるから、電話に依存する子どもたちの放課後の姿は、やはり気がかりになる。いずれにせよ、ニューメディアの発達など情報化社会の進展が注目されているだけに、このことは今後ますます気を配るべき課題と言えよう。

図13・電話をかけるとき、家族がそばにいるか

たいていそばにいる	いたりいなかったり	たいていいない (%)
18.0	47.6	34.4

図14・長電話に対する母親の態度

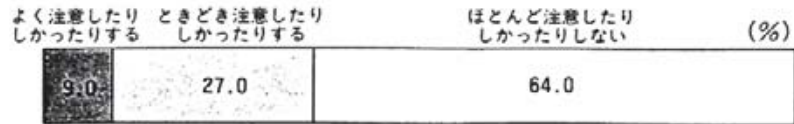


図15・友人への連絡事項があるときの電話使用の有無

